

紫色の「あざ」

打撲した覚えもないのに、足などに紫色の「あざ」ができることがあります。時には、重い病気の前兆という場合もあるようです。今回、この症状と原因について伺いました。



Q 紫色のあざの原因は？

私たちの血液には「血小板」という血液細胞が含まれており、血を止め、傷を治す役割があります。血小板は健康成人で15～40万/ μ l程存在しますが、この血小板が減ると出血しやすくなります。紫色のあざのことを「紫斑」、紫斑ができる病気を「紫斑病」といい、特発性血小板減少性紫斑病（ITP）、血栓性血小板性紫斑病、アレルギー性紫斑病などがあります。その他、脳梗塞・心筋梗塞の再発予防の抗血小板薬（アスピリンなど）、抗

凝固薬（ワルファリンなど）でも、あざが出やすくなります。これら様々な止血機能の低下が原因であざができます。また、病気ではなく加齢性の変化もあります。

Q ITPとは、どのような病気ですか？

ITPの患者さんでは、血小板数が10万/ μ l以下に減少して、手足のあざ、鼻血が止まりにくいなどの症状を認めます。どうしてITPになるかは不明ですが、血小板が減る要因として、①全身性エリテマトーデスなどの自己免疫疾患と同様、免疫が

Q ITPの治療は？

ITPの治療には、ピロリ菌除去、ステロイド療法、脾臓の摘出そしてトロンボポエチン受容体作動薬療法の4種類があります。

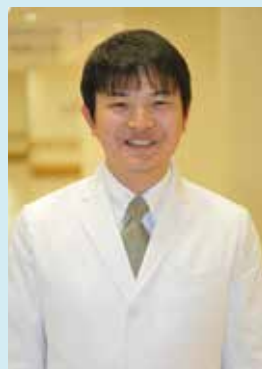
ピロリ菌陽性の慢性ITP患者さんに除菌治療を行うと、約60%の患者さんで血小板数が増加します。またステロイド療法は有効性の高い治療法ですが、長い期間服用し続ける必要があります。前項でふれた副作用が問題となります。ステロイドが無効な場合、脾摘が考慮され、摘出術により約60%は完治が期待できます。特に若い女性の場合、妊娠時に薬を服用しなくてもよいいため脾摘をお勧めしますが、手術前に治療の成功を予測できないため、患者さんにとっては「できれば避けたい治療」になります。一方、近年開発されたトロンボポエチン受容体作動薬は、慢性ITP患者さんの約80%に有効とされ、ステロイドの中止あるいは減量が可能となりうる

Q ITPの検査と治療開始基準は？

ITPの検査では、通常の診察および採血による血小板数の確認、また必要に応じて骨髓検査が行われます。以前は、とにかく血小板を正常値に戻そうと大量のステロイドを投与していました。大量ステロイドにより確かに血小板数は増加しますが、重篤な副作用（骨粗鬆症、免疫力低下、糖尿病など）が生じます。その後の研究により、血小板数が正常値に戻らなくとも3万/ μ l以上の値が維持できていることがわかってきました。現在では、ITP治療の目標は「血小板数の正常化」ではなく、「患者さんの死亡リスクを減らし、生活の質（QOL）を上げること」に重きを置いています。一般的には、血小板が3万/ μ lを下回る場合に治療を開始します。

治療です。日本ではITPは指定難病として医療費の公的補助があるため、患者さんは安心して新薬を使うことができます。

今月の先生



岐阜市民病院 血液内科
笠原千嗣 先生

○専門分野
造血器腫瘍化学療法、造血幹細胞移植
○役職
血液内科部長
研修センター長
輸血部副部長
外来化学療法部副部長
○主な資格
日本血液学会専門医・指導医

日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医
日本輸血細胞治療学会認定医
造血細胞移植認定医
日本内科学会認定医・総合内科専門医・指導医
○卒業年
平成8年岐阜大学医学部卒